

# 遠隔授業ではどこまでが可能なのか？

磯部 太一<sup>1\*</sup>, 磯部 靖世<sup>2\*</sup>

1. 北海道医療大学歯学部・全学教育推進センター

2. 秋田県立大学総合科学教育研究センター

\*著者は本稿について同等の貢献をした。

How much can we do in distance learning?

Taichi ISOBE, Yasuyo ISOBE

## 1 はじめに

コロナ禍の状況により、教育現場ではZoomなどのICT (Information and Communication Technologies) を用いたオンライン授業や、対面とオンラインを合わせたハイブリッド型授業という新しい形式の授業が日常となりつつある。教育研究においても、イノベーションとしての教育全体についての変革が指摘され (山内 2020), その変革がコロナ禍の影響を如実に受け、否応無しに進行している状況にある。このような背景の中、教育工学分野を中心として、様々な形態での遠隔教育の提案・工夫がなされている (赤堀 2020)。遠隔教育の課題は種々あるが、特に、授業内において意見を交換することや議論することが難しい点がまずは挙げられるだろう。教室に実際にいたとしても、話すことが難しく、Zoomなどの遠隔教育では、受講人数が多いと発言を促すことも難しい。また、少人数のクラスであってもZoomにおいては発言を躊躇する傾向がみられる。このような制約の中、様々な試みがなされてきたと想定されるが、筆者が実施した教育実践をもとに、コロナ禍の遠隔授業における意見交換や議論の方法の展開可能性を報告し議論を行う。また、コロナ禍においては、留学や国際交流の機会が減っていることも指摘できよう。例えば、語学の授業でも、ネイティブと話す機会や、ましてや留学の機会は大きく減った。ICTを用いた授業が浸透するにつれて、コロナ禍で留学を含む国際交流の機会にも変化がみられた。

このような環境の中、現場のリソースをもとに少しでもこのような機会を増やすことができないか、今どのようなことが実践できるのか。このような視点から以下では、報告と議論を行う。

## 2 遠隔授業における意見交換や議論の方法の展開

コロナ禍においては、授業形態も全面オンライン、ハイブリッド、全面登校などめまぐるしく変化することを多くの教員は経験したであろう。それらの変化に対応しながら、大きな修正が必要となってしまうと、その対応に時間を取られて、本来時間を費やすべき授業準備や学生のサポートに十分な時間を取ることができない。時間は有限であり、その有限な時間をどのように使用するか、それによって教育の質が担保される。すなわち、授業形態に変化が生じた場合も、大きな修正をすることなく、どのような形態になっても対応できるような事前準備や、授業実施の方法が必要なのではないだろうか。そうすることで、事態が急変したとしても、軽微な修正だけで対応が可能となる。コロナ禍のような非常事態の危機管理の重要な前提として、できるだけシンプルに計画・準備し、柔軟な対応が可能であるようにすることが望ましい。コロナ禍であるというだけで、学生

や教員には普段かかることのない大きなストレスがかかり、様々な制約が生じてきている。そのため、できるだけシンプルにして、不要な対応をできる限り減らし、本質的に重要なことに時間を割くべきであろう。

このような前提に立ち、本節では、コロナ禍の授業実践において、意見交換することや議論することが難しい中、筆者がどのような対応を実施したのかを述べる。様々な授業支援ツールがある中で、筆者はGlexa<sup>(1)</sup>というシステムをコロナ禍以前より使用してきた。そのため、コロナ禍においても、新しいシステムを使用するのではなく、内容を十分に熟知している、このシステムをそのまま活用した。Google Classroomについても一部使用してみたものの、授業支援ツールとしての有用性や使いやすさでは、Glexaに軍配が上がった。

授業形態が目まぐるしく変化するということは、その都度変更を迫られることを意味する。ただし大きな修正が必要ではない形で、意見出しや議論することを可能とするシステムの枠組みを、できるだけシンプルに組んでおくことで対応した。主に、GlexaのBoard（掲示板のようなもの）を使用して、特定の課題について意見を出してもらい、それについて教員側からコメントをすることや、学生の意見の内容を紹介することで、学生間での意見の共有にもつながり、その意見などから新たな説明の展開が可能となった。GlexaのBoardの使い勝手がいいところは、授業内の途中で思いついた課題でも、即座に意見を求めることが容易だという点である。課題の立てやすさ、学生の意見の提出のしやすさなど、システムとしてもシンプルかつ使いやすくデザインされている。このシステムは、意見提出だけでなく、質問を受け付ける場合などでも活用が可能であった。少し別の観点から考えると、ハイブリッドの授業形態では、教室に学生が半分いる状況であっても直接話すことは難しく、残りの半分の学生は自宅という環境である。全面対面の状況も生じることもあり、急遽、全面オンラインとなることもしばしば生じた。このように、授業環境を構成する変数の変更が多い場合でも、修正をすることなく、一括して意見出し・議論できる環境整備が可能であったことは、授業運営において非常に助かったといえる。

さらに、レポートの提出についてもGlexaのレポート提出機能（Report）を使用している。これも事前に考えた課題だけではなく、授業の話の流れに応じて、思いついた課題について課題提出してもらうことが容易である。そして提出されたレポートについては、翌週の授業などでフィードバックすることを実施した。

上記のBoardとReportという2つの機能においては、各々の役割の相互補完性も指摘できる。Boardでは即座に簡単な意見を出すことを求めたが、すぐに意見を出せない学生もいることは確かである。そのため、レポートなどで課題を出すことで、Boardよりはもう少し時間をかけて（10分から15分程度）考える機会を提供した。

また、Glexaシステムを使用して、最終課題である期末レポートの提出や、出欠確認についても実施した。このように、1つのシステムで一元化して、全ての授業支援を行うことでスムーズな授業展開が可能となった。

### 3 ICTの浸透による国際交流の機会の変化

昨今のコロナ禍により、教育現場ではこれまで対面での授業が通常だったものが、ZoomなどのICT（Information and Communication Technologies）を用いたオンライン授業や、対面とオンラインを合わせたハイブリッド型授業という新しい形式の授業が日常となりつつある。ICTを用いた授

<sup>(1)</sup> Glexaの詳細については、下記など参照。

<https://www.chieru.co.jp/products/high-school/glexa/>（2021年8月26日アクセス）

業が浸透するにつれて、コロナ禍で留学を含む国際交流の機会にも変化が見られた。例えば、これまでの日本国外の国で生活をし、その学校へ通う留学に変わり、自国にしながら留学を可能にする「オンライン留学」を提供する大学や、「オンライン留学」をする学生もいる。さらに、これまでは海外の学生との交流といえば、海外からの留学生が授業に参加する、メールやビデオをお互いの学習言語で交換する、という形だったものが、コロナ禍のICT利用により、大きく変化をした。オンライン授業に海外の学生が参加し、リアルタイムで交流することも可能となり、またICTツール（例えばPadletやFlipgrid）を用いて、オンライン上でやりとりやディスカッションをすることも可能となった。以下では、そのようなICTツールを用いて、海外渡航制限下で実施したりリアルタイム海外交流について報告を行う。

海外の大学（カナダ・マギル大学）の学生が日本の大学（秋田県立大学）の英語の授業に参加し、英語（日本人大学生の学習言語）と日本語（マギル大学の学生の学習言語）を用いて国際交流を2020年度に大学2年生の英語の授業で2回実施した。2020年度後期はすでに対面授業に戻っていたが、対面での国際交流は大きく制限されており、英語を使用するのは教室内のみとなっていた。そこで、マギル大学で日本語を勉強している学生とZoomでつなぎ、お互いの学習言語を実践的に話す機会を授業内で提供した。教科書などの教材中心の授業よりも、実際に英語を話すセッション後には学生の授業への参加度合いに変化が見られ、学習言語を実践的に使うことの重要性・必要性が改めて確認された。

マギル大学からの参加者と日本の大学の学生数には差があったため、日本人学生4～5人とマギル大学の学生1人を1グループとして、各グループがアウトブレイクルームで90分間日本語と英語を用いて交流を行った。Zoomでの交流は授業全15回のうち、中盤と終盤の合計2回実施した。交流が行われるまでは、漠然と教科書を使って英語を読み、その内容についての設問に答えたり、内容について話す授業であったが、交流の数回前からZoomでマギルの学生と話す具体的な内容や質問する内容をグループごとに準備する時間を授業内で設けた。その準備が始まってからは、徐々に目的を持って英語を使うという姿勢が見え始め、実際に交流をしているときは授業では日本人同士で英語を話すことをためらう学生でも英語を話し、またお互いに聞こえた部分をつなぎ合わせることでマギル大学の学生の英語を理解し、助け合いながら英語でコミュニケーションをとっていた。

マギル大学の学生も、日本の状況同様、2020年9月からずっとオンライン授業が続いて、日本語を授業担当教員以外と話す機会が著しく制限されていたため、日本語を実践的に話すこと、そして自分の日本語能力を知るための有益な機会となった。

Zoomでは、まずお互いの緊張を緩和するためにアイスブレイキング活動（例えば、「今までで一番恥ずかしかったできごとを学習言語で話す」）をしたのち、日本人学生が準備した質問を英語で聞き、最後の20分間はお互い好きなことを好きな言語で話すという流れで進んだ。

Zoom中は、授業担当者は各ブレイクアウトルームをまわり、必要であれば学生の間にやりやりの手助けを行うつもりであったが、ほとんどそのような必要はなく、双方の大学の学生の日本語力・英語力で90分間、交流することができた。

この国際交流を通して、コロナ禍で急速に対応せざるをえなくなったICTを活用した授業は、ただ対面の授業をICTを通して実施するのではなく、その利点（例えば、物理的な距離を超えて繋がることのできる）を使えば、今までできなかったこと・していなかったことが可能になることが示された。

#### 4 今後の展望

今回、我々が授業実践したものは、コロナ禍において必要に迫られて実施したものである。正直、スムーズにいかなかったことも多々あるが、様々な制約の中でこのような取り組みを実施できた経験は、今後の教育において大きな財産となる。他にも様々な教育実践が実施されてきた蓄積があるが、個々の教員がそれを今後の教育にどのように活かしていくのか、また大学全体として教育蓄積の方法としてどのように今後の糧にしていくのか、そのようなことが求められる。まだまだ、様々な制約がある状況において、その制約の中でできる限り最大限の教育を実施していくことが望まれよう。コロナ禍において、教育に携わる教員が、遠隔と対面の強みも弱みも知ることとなったことは、大きな経験となろう。本稿が、教育実践において、少しでも参考となることがあれば幸いである。

#### 参考・引用文献

赤堀侃司 (2020) 『オンライン学習・授業のデザインと実践』 ジャムハウス  
山内裕平 (2020) 『学習環境のイノベーション』 東京大学出版会

#### 謝辞

著者の磯部太一は、論文全体の執筆に関わり、「2 遠隔授業における意見交換や議論の方法の展開」については主に執筆した。磯部靖世は、論文全体の執筆に関わり、「3 ICTの浸透による国際交流の機会の変化」については主に執筆した。